

第 20 回中医学会勉強会 漢方応用講座

講師 路京華 老師

リポート：岸奈治郎（館林厚生病院漢方内科）

開催日：2016年2月6日

今回は症例提示から、参加者全員で自分の弁証を勘案して、平馬先生と岸が板書をし、それを解説しながら症例を考えて路先生が解説を加えていくというスタイルで進行しました。

【症例】

67歳 女性

主訴) 1ヶ月続く悪風

現症) X年1月ごろ、中国の南方で暖かい沿岸地域に寒さを避けて養生をしていた。

毎日温泉に入り静養していたが、汗をたくさんかいていた。

5月頃に北京に帰ってきたところ、寒気を感じ汗が良く出るようになった。

6月になっても症状が続いていたため受診した。

既往歴) なし

現症) 寒気がする。寒くて窓を開けられない。

6月にもかかわらず秋の服を重ねてきている。少し動くと汗が出て動けなくなってしまう。

疲労、全身倦怠感、元気が無い。

頭が重くてすっきりしない。頭に布を巻いているような感じがする。

口が渇いてよく水を飲む。

食欲は良好。便は1日に1回だが粘っていてすっきりしない。

睡眠良好。

望：目に元気が無い(乏神)、顔色萎黄、

脈：沈弦細

舌：胖大。暗紅。白膩苔。中心が剥がれている。

~~~~~ここまでの情報を整理して弁証、治法を組み立てました~~~~~

〈平間先生〉

〔病性〕 裏虚が主 寒

〔病勢〕 正虚 邪の内生

〔病位〕 衛分 肺

〔邪〕 気

〔不足〕 湿

〔弁証〕 衛気虚損 肺気虚不能宣発 湿

〔治法〕 益気固表 補肺宣肺 利湿通調水道

〔処方〕 黄耆 15 白朮 6

防風 6 桔梗 6 細辛 3

桂枝 4 五味子 4 茯苓 6

沢瀉 6 乾姜 3 大棗 6 炙甘草 4

〈岸〉

〔病性〕 表裏 寒 虚

〔病性〕 正虚

〔病位〕 表 脾

〔邪〕 气脱 气虚下陷

〔弁証〕 表虚不固 脾气虚 中气下陷

〔治法〕 補気固表 建脾昇提

〔処方〕 挙元煎(黄耆・人参・白朮・甘草・升麻) もしくは補中益気湯

〈近藤先生〉

〔病性〕 裏 虚 > 実 寒

〔病勢〕 正虚 > 邪実

〔病位〕 肺

〔邪〕 湿

〔不足〕 气虚

〔弁証〕 肺気虚 湿

〔治法〕 補益肺气

〔処方〕 補中益気湯加黄耆麻黄

〈〇先生〉

〔弁証〕 湿鬱衛虚

〔治法〕 調和営衛通陽虚湿

〔処方〕 桂枝加黄耆湯

岸「桂枝加黄耆湯では湿を取れないのでは？」

○先生「湿は黄耆で取れるというのが一つ、また気を巡らせると湿が取れると思います。」

路老師「湿は表にあるということですね。桂枝湯は営弱衛虚のときに用いられます。悪風が有ること汗が出るのが桂枝湯の条文にあります。今回の症例の悪風と発汗は一緒ですか？桂枝湯を用いる時は風邪が衛分に当たって邪正相争が起こって悪風が出ます。太陽病では先ず悪寒があります。その後熱が上がります。悪風では悪寒よりも程度が軽い。熱を作る前段階です。」

○先生「私の考えは衛虚営弱の邪気の無い場合の桂枝湯の使い方と考えています。」

路老師「岸先生はどの症状を下陷と考えていますか？」

岸「下痢は気の昇提作用の低下だと考えました。」

路先生「この症例で湿邪の特徴はどうですか？」

岸「体が重い、下痢、むくみ、頭が重いという症状だと思います。」

路老師「湿邪は陰邪なので陽気の邪魔、損傷をします。下痢も痺虚のように水っぽい未消化な感じではないし、大腸湿熱では細くて粘っこい便が出ます。岸先生の言うような痺虚による下痢便ではありません。脾は昇精の作用があるので下陷になると胃下垂や子宮脱などの症状が見られます。」

岸先生の虚とはどのくらいの虚ですか？」

岸「衛気は肺が司ります。衛気は虚しているけれども肺には異常が無いのでまだ深刻な虚ではないと思います。」

路老師「衛気は分肉を温めて腠理をよく調節して体温調節などをする」（衛気者、所以温分肉、充皮膚、剛腠理、司開合者也）**靈樞（本臟篇）**。「外を守って漏れ出ないようにしています。」**素問（生氣通天論）**。

「つまり衛気が虚していることで腠理も調節できず汗が出てしまい、冷えが来ても調節できず水も巡らせられない。表が虚しているので麻黄を入れると…。麻黄は発汗作用、気管拡張作用、利尿作用（越婢加朮湯、上半身のむくみ）の作用があります。通調水道を整えるという点では良いかもしれませんが、表の汗を出してしまうとより気も出て行ってしまうので良くありませんね。」

平馬先生「黄耆の補気作用を表面にドカンと送りたいと言う解釈もありますかね(笑)。」

路老師「この症例で、動くと汗が出るならばエネルギーも発散してしまいます。疲れ、倦怠感汗が出れば出るほど気が漏れ出て強くなってしまい、いくら気を補ってもどんどん気虚になってしまいます。」

路老師「傷寒論では汗が出ると陽気が傷つく、温病学では汗が出ると陰が傷つくと考えています。なので傷寒論では陽気を救う方法が多く示されています。」

傷寒論 七条

太陽病 発汗遂漏不止 其人悪風 小便難 四肢微急難以屈伸者 桂枝加附子湯主之。

かぜの治療をするときは、その人によって違います。もともと脈が遅い人に麻黄などを使っても本人の力が無いので発汗しません。量を増やせば発汗するけれども汗が止まらなくなります。もともと陽気が足らなければ麻黄附子細辛湯などもあります。太陽経と少陰病の両方使わなければなりません。現代治療で解熱剤を使うとより一層壞病になります。傷寒論ではほとんど誤治によってごちゃごちゃになった症例をどうするかというのが書かれています。7条に戻って考えて見ますと、汗がたくさん出ると尿が少なくなると、津液が少なくなると筋が固くなるので、手足が硬くなる感じになります。

もともとの症例に戻りますと、この症例では衛気虚は軽いか、重いかといえは重症です。衛陽虚の状態です。陽を補う附子と肉桂の違いはどうですか。附子は十二経絡を走って守らず、と有ります。体表の衛気虚が虚してしまうと、平馬先生の処方にあるように玉屏風散の成分(黄耆、白朮、防風)を使います。衛気を補って体を守るバリアーの強化をするわけです。また、皮膚というのは外と接しています。このバリアー機能が低下するとアレルギーなどの症状も現れやすくなります。でもこれは衛気が虚して軽度の表陽虚の場合です。」

平馬先生「私は附子を使う必要があるまでは、表陽虚が強くないと考えていたので細辛と桂枝にしましたね。」

路老師「桂枝は表の陽を補充して皮膚を温めます。桂枝加黄耆湯は黄耆が補っているので良いです。附子では補えません。」

#### 傷寒論 二十二条

発汗 病不解 反惡寒者 虚故也 芍薬甘草附子湯主之

#### 傷寒論 七十条

発汗後 惡寒者 虚故也。不惡寒 但熱者 実也。当和胃気 与調胃承気湯。

かぜを引いたら邪のせいで悪寒がします。そこで治療をしたが、その後に汗を出した後に悪寒が出てくるのは表が虚してしまった状態です。この衛気の虚はどれくらいの状態なのかを判断して附子が必要なかどうか考えなくてはなりません。

汗を出した後に悪寒がなくなって熱が出てくるのは陽明経に入った状態です。そうなれば調胃承気湯のような薬を使うことになりますね。

#### 傷寒論 太陽病中 二十三条

病常自汗出者、此為榮氣和。榮氣和者外不諧、以衛氣不共榮氣諧和故爾。以榮行脈中、衛行脈外、復發其汗、榮衛和則愈、宜桂枝湯。

常に汗が出てしまう状態について書いてありますが、これは傷寒以外でも解釈できます。衛気が弱かったり衛榮不和のときに汗が出やすいというのを雑病でも解釈できます。桂枝湯は汗が出ない時に汗を出す作用と汗が出ているときに汗を止める作用があります。ここ

に黄耆を入れることによって根本的な気を補うことができます。附子を使うと巡らせるけれども少ない気を補うことをしなければなりません。

この病気で表の治療については話が出来ました。しかし体の内側の病態もあります。此れを同時に治療するか、無視するか、別々に治療するか、次回お話しします。」